



## アカデミーヒルズ六本木ライブラリー見学記

進藤 達郎

六本木ヒルズ。この春オープンし、いま日本中から注目されている一大複合施設である。その中核をなす森ビルの49階に位置し、今まで日本ではなかったライブラリーサービスを展開しているのが、アカデミーヒルズ六本木ライブラリーである。今回東京へ行く機会があり、その際ライブラリーを見学することができたので、不完全ではあるが見たこと、感じたことを書き留めておきたいとおもう。

まずは見学前に行われたプレゼンテーションと、配布資料のディレクターズ・メモをもとに、運営者のライブラリーに対する考え方を見てみたい。

恒常的な知の獲得・再配布システム。これが、ライブラリーに対する運営者の認識であり、そのシステムを活用することがナレッジ・マネジメントであると考えている。ライブラリーには、ライブラリアンやリサーチャーといった Information Professional を配置し、ナレッジ・マネジメントの核として活動することになる。

そのライブラリーの目標は、ライブラリーをイノベーションの「場」とすることである。六本木ヒルズが提供する「アーク都市塾」を中心に、社会人向け生涯学習機関としてのアカデミーヒルズを支える learning のための存在としてライブラリーを位置づける。従来日本にあった図書館は目に見える成果をあまり生み出してこなかったことから、設置者から cost center として見られがちであったが、彼らはライブラリーから新たなビジネスを生み出し、ライブラリーを profit center へ変えようと試みている。

このような認識のもとに開設された六本木ライブラリーは、大きくわけて3つのコンセプトを柱に、「都心の書齋」としての会員制ライブラリーを目指している。第一に、常に東京に関する最新の話題・問題に関する資料を提供すること。第二に、フロー型のコレクションを形成し、ストックを極力作らないこと。第三に、高度に専門的な資料や興味本位の低俗な資料を排し、普通の人を読んで活用できるような資料を収集すること。

(次頁へ)

### [目次]

アカデミーヒルズ六本木ライブラリー見学記	進藤 達郎	…	1
京大図書館史こぼれ話 その二	廣庭 基介	…	4
大図研京都数珠つなぎ 第67回	保理江 はる	…	5
2002年度会費納入のお願い		…	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp) (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

これらはいずれも、コレクションの膨張を抑制しつつ利益を追求するという企業図書館（室）の目標を、時間・空間・内容の3点から分析したものと考えられる。

では、以上のような点を踏まえて、ライブラリーを見学した際に見たことや感じたことを以下にお伝えしたいと思う。

ライブラリーといっても、それに対応する建物や部屋があるわけではない。会員専用のワークスペース（図書館の研究用個室みたいなもの）以外は全て、森ビル49階の外周廊下やオープンスペースを利用しており、49階の部屋自体は森ビルの会議室・会議場である。もちろんそのために設計された広い廊下となっているが、通常の閲覧室とは全く趣きが異なる。設計者は、本来デッドスペースとして嫌われる廊下に書架を並べたらどのくらい本が並ぶか？という点から発想したそう。

まずは、ライブラリーブックストア。ここには新刊書が、出版者別のタイトル五十音順で並んでおり、自由に手にとって見ることができる。会員は、この中にライブラリーで所蔵して欲しい本があれば、その本に短冊を挟んで希望を出すことができる。いわゆる見計らいであり、会員一人一人が選書にかかわることができるようになってきている。ただし、最終的な受入決定はライブラリー・ディレクターや大学教授、企業重役などで構成される選書委員会で決定されるようだ。ブックストアという名前が示すように、気に入った本があればその場で購入することが可能。

ここに配置されている本は、大手の出版者や取次ぎから新刊書を入れているようだが、どこまでの範囲をカバーできているのかは不明である。また、東京に関する最新の話題・問題に関する資料、あるいは普通の人が活用できるレベルの資料という基準を、納入者が判断しているのかスタッフが判断しているのかも分からない。おそらく、選書の段階のため明確な基準はないものと思われるが、納入の時点である種のフィルタリングが行われてしまうという見計らい制度の問題をどうクリアしているのか気になった。また、貸出や複写は一切しないので、持ち出したいのなら買って下さいというのだが、会費を払って利用している会員に、はたして受け入れられるだろうか。

次はライブラリーカフェ。外壁部分はガラス張りで、展望のよい広い空間に白いテーブルと椅子を配している。カフェに備えつけられている外国雑誌や、書架から持ってきた蔵書をコーヒー・ビール・ワイン片手に閲覧でき、会員同士のコミュニケーションの場としても利用できる。

雑誌は多くが英語で、ニュース・ビジネス・スポーツ・ファッションなど、日本の大型書店でも手に入るようなメジャーなものを中心に100誌が置いてある。外国雑誌をよく読む人にとっては利用価値のあるサービスだと思うが、日本語の雑誌を置かない理由は何だろうか。スペースや予算の問題もあるだろうが、イメージ重視の結果というのが本当のところかもしれない。さすがに展望など、環境は文句なしに素晴らしい。都会のサロンとして、朝でも夜でも、時間があれば立ち寄りたいたいと思わせる空間である。

グレートブックスライブラリーは、高い書架とやわらかい照明を使った書齋のような雰囲気の間である。高さ六メートルの書架に並べられているのは、聖書や史記、ケインズなどのいわゆる古典となっている。

リラックスできるよう考慮されて椅子が配置されているなど、ゆったりとした書齋のような雰囲気作りをしているようである。グレートブックスという名前からも分かるように完全にイメージ優先で、利用価値はいまいちではないかと思う。とりあえず、使い勝手はよくなさそうである。フロー型のコレクション形成というコンセプトのもと、蔵書の新鮮度は常にチェックされ、古くなった蔵書は他館へ寄贈するなどの方法で廃棄されることになっているので、最新の蔵書群に対する古典の部屋という位置づけだと考えられる。なお、高い棚の本を取るために、はしごが用意されている。

蔵書が並んでいるのが、マイライブラリーである。書架の裏側が外周の半透明ガラスになっており、外の光が入ってくる。棚板もガラス製で、板の周縁部にアンテナとセンサーが取り付けられている。これは蔵書管理のために採用された IC タグに対応するもので、およそ3分ごとに蔵書管理コンピュータが全書架をスキャンして本の現在位置を確認するらしい。検索端末ではタイトル、著者名等から検索が可能で、請求記号の代わりに書架番号と段数が表示されるようになっていいる。配架法については、図書館分類法を使わず独自にクラスター分けをしているようだ。

外光が書架の裏側から入ることについて、背表紙が読みにくくならないように照明を工夫したらしい。確かに背表紙が読みづらいいという事はなかったが、雰囲気重視の照明のため、本を手にとって読むには若干暗いと感じた。配列は NDC を排し独自のクラスター分けで配列したとのことだった。現在蔵書冊数 7,500 冊、最大収容冊数 25,000 冊ならば、図書館分類法を使わなくても維持管理はさほど難しくないかもしれない。しかし、だからといってディレクターズ・メモにあるような、「個人の書齋で NDC 順に配列された書棚を見たことがありますか？」という批判には疑問を感じる。個人の書齋と図書館ではそもそも想定される蔵書冊数にかなりの差があり、維持管理する上での分類法の必要性が全く異なるし、利用対象者についても書齋なら一人（あるいはごく少数の知人）だが、図書館ならば不特定多数であり、その点にも注意を払う必要があると思う。

全体的にハイソサイエティな雰囲気が盛りだくさんの空間で、都会の書齋といううたい文句にふさわしい内容だった。ただ、ライブラリーすなわち図書館として見た場合にはその利用価値に疑問も感じる。どちらかという飲食可能な書店という感じがしたし、実際その線を狙っているようだが、安くはない会費を払ってまで書店とカフェの複合施設を利用する人がはたしてどれくらいいるだろうか。ライブラリーの重要なサービスの一つであるオンライン・データベースの提供についても、個人に対して提供するという考えは素晴らしく、自宅から接続可能（一部）なことも評価できるが、サービス自体がオプションで別料金となっており、さらにデータベースごとの従量料金もかかるのでは、利用に対するハードルが少々高いような気がする。ただ、このライブラリーは基本的に森ビルにオフィスを構えるビジネスマンを対象に考えているので、一般的な図書館とは性格が異なることを考えれば決して利用価値は低くない。ライブラリーを森ビル全体の企業図書館としてみると、利用者側は、ライブラリーがビジネスを展開する上で必要な情報さえ提供してくれればコスト以上の利益を得られるため利用価値があり、ライブラリー側はオフィスが繁栄することで森ビル全体の利益が上がり、六本木ヒルズ全体でペイするという構図が描ける。

今回は、会員の活動をサポートするスタッフ、中でもコンシェルジュがどのような仕事をするのか聞くことができなかったので判断はつかないが、彼らによって提供されるサービスにこそ利用価値があるのかもしれない。

ビジネスライブラリーというイメージから、見学前ははっきりビジネス支援図書館という内容だと思っていた。しかし見学してみると資料もビジネス書に限らず広く教養一般をカバーしようとしているし、ビジネス支援というよりは、むしろ学びたいビジネスマン（サラリーマンではない）のためのライブラリーだった。これは運営者がビジネスと教養を線引きせず、ブラウジングによるセレンディピティをライブラリーに求めているからであろう。

このように、アカデミーヒルズ六本木ライブラリーは日本における従来の図書館の概念とは全く異なるもので、非常に好奇心をそそられる刺激的な存在である。見学後に、参加しなかった人も含めて数人と話し合っ感じた共通の印象は「知のスポーツクラブ」。今後の活動に注目していきたいと思う。

参考文献：「ディレクターズ・メモ：「図書館」というコンセプトの拡大への挑戦」

[http://www.academyhills.com/library/top\\_memo.html](http://www.academyhills.com/library/top_memo.html)

※「アカデミーヒルズ六本木ライブラリー：「図書館」概念の拡大への挑戦」『情報管理』vol. 46 no. 3 p. 190-194 と同じ。

しんとう たつろう（京都大学工学研究科・工学部物理工学系図書室）

## 京大図書館史こぼれ話 その二

廣庭 基介

## 島・川田双方の父親同士は知己であった(1)

一方、島文次郎博士の実父・野口松陽(常共)は諫早から上京して太政大臣三条実美に漢詩と能書の才を認められ、明治4年に太政官正院外史の八等出仕(月俸60円)に就職することが出来ました。この年の10月6日に次男・文次郎が誕生します。松陽と三条実美の結び付きは、幕末の七卿落ちに際して、実美が佐賀などへ遁げたことがあったことや、島博士の養父・島惟精が、播州林田建部藩の儒者・河野鉄兜塾をはじめ、江戸の経学者・塩谷宕陰の門下生となり、さらに文久2年(1862)に入洛し、三条実美邸に出入りするようになったという経験を持っていたからだと思われます。野口松陽の名前が『袖珍官員録』の明治5年版に初めて出ています。少なくとも明治5年の時点で、川田順の父・剛と島館長の実父・野口常共(松陽と号す)とは同じ職場における上司と部下という関係であったことが判ります。島館長の元姓は野口であり、幼い時に父の塾生時代の知人・島惟精の養子に出されたから島姓なのです。養父島惟精は後に内務官僚になり、初代岩手県令(知事)、茨城県令、元老院議員、勅任官一等になります。

野口松陽の初任給は月に60円、川田剛の月俸がその4倍強にあたる250円。これが如何に高給であったか、明治7年の巡査の月給が4円、明治19年の教員の初任給が5円、明治7年の大工の平均日当40銭を基にした月手当12円と比較すればその高給振りが判るでしょう。

明治6年の『官員録』では川田剛の名前は消え、一方、野口松陽は正七位権大外史に昇進しており、明治7年には従六位権少内史に進みます。明治8年には制度が変わって、内・外の区別が無くなり、野口松陽は従六位権少史、月俸150円となりました。彼の同僚には岩倉遣外使節団の随員で『特命全権大使米欧回覧実記』を著した久米邦武や、勤皇志士で、新田義貞の後裔・新田満次郎を擁立して尊皇隊を組織、東北戦争に従軍、後に元老院議員、貴族院議員となった金井之恭などがおり、上司には滋賀県水口出身の巖谷修(児童文学作家巖谷小波の実父)、鳴鶴の号で有名な明治大正書壇の第一人者であった日下部東作などがおりました。

川田剛の名は明治9年の官員録に正院に属する修史局の3名の一等修撰の中に正六位で再び出ています。つまり、島博士の実父である野口松陽が明治4年に太政官に就職して、少しずつ昇進している間に、川田順の実父・剛は、何らかの理由で太政官書記官の官職を辞めて、数年後に同じ太政官正院に属する修史局の国史編修官の幹部に転じていたこととなります。彼はその後、文部省から東京大学教授に転身していきます。

島博士の実父・野口松陽は本名と常共、別号を伯辰といい、佐賀鍋島藩の支藩・諫早の領主諫早氏の侍医を勤める野口良陽の長男として天保13年(1842)に生まれました。少年時代の終わり頃に、播州林田藩主建部氏の藩校・敬業館の教授であった河野鉄兜にその英才を見出され、鉄兜の私塾で漢詩文と書道の腕を磨きました。前に述べたように、その塾に豊後府内・大給藩の勤皇志士島惟精が入塾していた訳です。

松陽には持病があつて、維新直後の政権不安定期から8年間勤め上げて内閣少書記官にまで昇進して来たのですが、明治12年3月14日をもって辞職し、野州(下野・現栃木県)の温泉において病氣療養に専念しました。しかし、2年後の明治14年5月4日、40歳の若さで亡くなり、明治天皇から祭料300円が下賜されました。その3ヵ月ほど後の明治14年8月18日付けで、

野口常共著『毛山探勝録』上下巻（毛山は下野の山々）と題する和綴じ2冊本の漢詩文集が出版されました。京都大学附属図書館所蔵のこの本の奥付には、「明治十四年八月十八日御届 東京麹町区中六番地二十一番地 著述人 野口常共、全下谷区仲徒町三丁目廿六番地出版人 森泰二郎」とあり、また、上下巻ともタイトルページに図書館で捺印した「明治・三二・七・五・民贈」という丸形印と、「野口市太郎寄贈本」という縦細長の印が捺印されています。この野口市太郎というのは、島博士の実兄の野口一太郎のことで、号を寧斎けいさいといった著名な漢詩人です。寧斎は、実弟の文次郎が京都帝国大学附属図書館長になったので、20年前の明治14年に出版してあった父の漢詩文集を弟の主宰する図書館に寄贈したのでしょう。（次号へつづく）

ひろにわ もとすけ（元京大図書館員）

連載コーナー 大図研京都数珠つなぎ 第67回

ほりえ はる さん  
保理江 はる さん

大図研京都会員のほとんどの皆様、はじめまして。私は現在大学図書館の外部委託として主にカウンター業務、レファレンス等を担当しています。大図研に参加してから3年近くになりますが、これまで活動に参加したことはなく、今回このような場をいただいて自分としては恥ずかしく、申し訳ないような気持ちです。でもせっかくいただいた機会ですから、何か少しでも情報提供できればと思います、自分が就いている図書館業務について書かせていただくことにしました。

私の担当業務はまずはレファレンス、そして貸出返却を含むカウンター業務全般です。その他利用者教育（各種ガイダンス）、データベースマニュアルの作成、各種調査業務なども行っています。

レファレンス業務は主に論文検索に従事しています。理系の図書館なので、院生や研究者、教員の方々が特に海外の文献の複写を依頼されることが多く、この書誌の特定→所蔵館の調査を行います。書誌、所蔵ともにすぐデータベース、OPACでヒットすればいいのですが、年代的に古いものは書誌がデータベースになく、所蔵もOPACに載っていないことが多いので、古い冊子を当たったり、Web上で手がかりをさぐったり、他機関に参考調査を依頼するなどしています。また会議録や予稿集、各種レポート類や学位論文などは新しくても書誌が特定しにくいいため複数のデータベースを片端から当たって見当をつけます。これも手がかりをつかむにはWeb検索が役立つことが多いです。

以前はこういった依頼を利用者の方々がご自分で下調べすることなく申し込みに来られることがほとんどでした。データベースの存在と使用法が利用者に浸透しておらず、せっかく使えるツールがあるのに、論題やページなど依頼に必要な情報でも典拠に記載がなければ不明のまま申込みをされることが多くありました。またカウンターでも、忙しさのあまりその場で検索方法を教えるゆとりがなく、そのまま受け付けてしまって後で検索を代行している現状でした。しかしそれでは利用者の自立につながらずデータベース利用も促進されないうえ、この2年ほどの間、ガイダンスやカウンターでの利用者教育に力を入れてきました。現在ようやくデータベース利用が浸透してきて、うれしいことにご自分で検索された画面を持って申し込みに来られる方がかなり増えてきました。ただ、申込み数自体が飛躍的に増えているので私たちがこの業務にかける手間・時間は減るどころかさらに増加しています。

また現在、このレファレンス業務とカウンター業務の区別がひとつの課題となっています。私の勤める館では、以前からレファレンスとそれ以外のカウンター業務（貸出返却含む）を分けることなく同一カウンター内で扱ってきました。ひとつのカウンターで、貸出返却その他さまざまな用件・問い合わせにも対応しつつレファレンスも受けているという現状です。レファレンスとその他業務の区別については一概にこう分けるべきとは言えず、それぞれの館の個性（利用者数、対象分野、依頼の傾向など）、また館ごとの事情によってその館独自の線引きをしているのが現状だと思います。あるいは線引き自体をしていない館もあるかもしれません。私のいる館では理工系という分野上、論文検索依頼が非常に多く、利用者を待たせないためにはカウンター全員で対処する必要がありました。その事情から、基本的にレファレンスと貸出返却を区別せず全員で受けるようになり、必要な情報はできるだけみんなで共有するように努めてきました。

しかし大学としての方向性やカウンタースタッフの業務分類等の問題から、やはり窓口を分ける方向で現在話が進みつつあります。確かに利用者が腰を落ち着けてレファレンスを依頼できる、貸出返却を離れた専門の窓口は必要です。書かれた申込書を受け取るだけでなく、インタビューによるやりとりで時間をかけて利用者の要望を引き出していくことが大切ですし、それによって図書館で今どういうことができるのか、どんなサービスが受けられるのか利用者理解していただき、図書館の機能を十分に活用してもらうことにもつながると思います。ただ、現状の人員配置でそれを実現するには難しい点があるのも事実です。当館の場合、窓口を分けた場合現在の体制ではレファレンス要員が一人になってしまうため、現状の依頼数をこなしていくには業務の分け方にかなり工夫が必要です。それでも試行錯誤を乗り越えてやっていくしかないですね。

業務を行う上でいろいろな問題はつきものですが、利用者を第一に考える視点を忘れずに、よりよい図書館をつくっていきけるよう、自分自身も希望をもって仕事を続けていければと思っています。また皆様にお世話になることもあるかと思っておりますので、そのときにはどうぞよろしくお願いいたします。

### 2002 年度会費納入のお願い

向暑の候、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。2002 年度大図研会費及び支部会費の納入状況をお知らせいたします。すでに 2002 年度（大図研会計年度 2002.07～2003.06）が終了していますが、納入率は六割程度と依然として思わしくない状況にあります。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

#### 記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は京都支部財政担当・吉田（京都工芸繊維大学）までお願いいたします。

myos@m02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp